

日本昔話「炭焼き長者」にみる運命

千野美和子

I、初めに

ここで取り上げる日本昔話「炭焼き長者」は、貧しい炭焼きの男が福分をもった女性と結婚したことによって黄金を発見し長者となる話である（稲田ら、1994）。この話は、初婚型と再婚型があり、ここで取り上げるのは再婚型の一つである。また、この話は、伝説として語られる形が多く、中でも「炭焼き藤太」は全国各地に広がった伝説であるという（稲田ら、1994）。これについて、民俗学者柳田國男（1963）は「炭焼き小五郎が事」という題で詳細に分析している。その後、伊藤（2007）は、「一国民俗学」という柳田の方法論を踏まえた上で、東南アジアの昔話との関連を論じている松本信廣の説も紹介している。

この昔話は、「長者」という題名がついているが、話の発端は炭焼き長者と結婚した女性の運（ここでいう福分）が授けられるところから始まり、その女性が父の決めた結婚相手と自ら決別し、倉の神の言葉に従って炭焼きの男と結婚し、彼の所有している黄金の価値を見出すという物語であり、語る対象の主眼は長者となった炭焼きの男ではなく、その妻となった女性の方にあると思われる。その意味で、この物語の主人公はこの女性であるといえる。

ユング心理学者でユング派分析家の河合隼雄（1982）は、昔話に登場する様々な女性像を検討して、日本人の自我＝意識について論じている。そして、その日本の昔話の中の一つの頂点をなす像としてこの昔話の女性像をあげて、日本人の意識の在り方について考察している。また、ユング派分析家の豊田園子（2013）は、女性のスピリチュアリティという観点から、この物語の女性像を分析している（註1）。本論文では、二人の観点を取り入れ、かつ少し異なる視点も含めてこの昔話を考察したい。筆者がここで取り上げる視点は、女性主人公とともに、話の発端で主人公と同時に主人公とは逆に不運を授けられた前夫の背後に働いている運命の力である。女主人公の物語が表側で進んでいく裏側で、夫の物語が進行していく。それを司どるのは、

初めに授けられた運である。

II、昔話のあらすじ

東長者と西長者があった。二人は釣友だちだった。そのうち二人の女房のお腹に子どもができた。ある夜二人はいつものように連れ立って磯へ行った。潮が引かないので、一休みして寄木を枕にして寝ていた。ところが、東の長者はすぐ寝てしまったが、西の長者は眠れないでいると、竜宮の神様と寄木との会話を聞いた。東の長者と西の長者が子どもを産んだので位をつけに行ったと言う。「東長者の子は女の子で、その子には塩一升の位。西長者の子は男の子であった。これには竹一本の位をつけて来ました」と竜宮の神様が言うと、寄木は「塩一升は多すぎましたね」「いや、その女の子はそれほどの生れをしています」と言って、竜宮の神様は帰って行った。

西長者は神様たちの話を聞いて、今のうちになんとか考えねばと思い、東長者に相談して、もしそれぞれに女の子と男の子が生まれた場合、男の子を女の子の躰にしよう約束した。家に帰ってみると東長者の家には女の子が、西長者の家には男の子が生まれていた。

二人の子どもは大事に育てられ、18の年になった。東長者は約束どおり、西長者の子を躰にもらった。

二人は夫婦になって暮らしていたが、5月のあらかち（大麦の収穫祭）の日になった。女房は麦の飯をたいて神様や先祖に供え、それから夫にも差し出すと、夫はたいそう怒って「おれは米の苾なら食べるが生づきさえも食ったことがない。新麦の飯を食えというのか」と言ってお膳もご飯もけとばした。女房はそれを見て「私はとてもここで暮しをすることはできません。この家倉は父さまがあなたに渡したものですから、あなたの自由にして下さい。私は今あなたがけ飛ばした膳と椀だけ貰って、どこへでも落ちていきます」と言って、膳と椀とをもらって、こぼれた麦の飯を一粒も残さずに拾って家を出ていった。

門を出ると二柱の倉の神様が「麦でさえもけ飛ばさ

れるくらいだ。われわれもこの家に残っているとけ飛ばされるにきまっている。心も美しく姿も美しい働きものの炭焼五郎の所に行こう」と話すのを聞いて、「これはよい話をきいた、わが倉の神様の言われることだから、どうしても炭焼五郎の家をさがして見よう」と言って、歩いて歩いて、炭焼五郎の小屋に行った。

五郎は泊めてくれと頼む女房を家に入れ、女房の持ってきた麦飯を二人で食べた。女房は五郎に嫁にもらってくれるように頼んだ。五郎はびっくりしてことわると私の望みだからぜひ嫁にしてほしいと頼んだ。五郎は「そんなにいわれるなら、どうか私の嫁になって下さい」と承諾した。

そのあくる日の朝、女房は五郎に向かって「あなたが初めに焼いた炭竈から、今日焼いた竈まで一つ残らず順々に見て来ましょう」と言って、二人で竈を見て回ると、どの竈にも黄金が入っていた。二人はたちまち長者になった。

竹一本の男は、その後だんだん貧乏になって、あとでは竹細工物を売って村々を歩いていた。あるとき、炭焼長者の家に来て来た。五郎の女房はまだ男の顔を見知っていたので、米一升の品物は二升で買い、二升の品物は四升で買ってやった。竹一本の位の男は「馬鹿な女もいるものだ、今度は大きな籠を作って来て売ってやろう」と思って、大きな籠を作って持って行くと、女はその男と別れるときにもらってきた膳碗を見せてやった。男はそれを見てたいそう恥じて舌を噛みきって死んでしまった。女房は倉の下に穴を掘って、「お前に供えるものは何もありませんが、あらまちの日だけは麦飯を供えて祭りますから後は何も食べようと言ってはなりません。倉に生き物をのぼらせないようにして下さい」と言った。

それから、高倉の新築祝いには最初に女に小俵を持たせて倉へのぼらせる習わしになったという。

（『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎—日本の昔ばなし（Ⅲ）』より要約）

Ⅲ、この昔話のタイプについて

この昔話は、『日本昔話大成』では、「本格昔話」の「運命と至富」の中に分類される151A-1「産神問答」の類話の1つとして収録されている。関（1978）はこの項について、「人の運命は誕生とともに産神によっ

て決定される。婚姻も富も死も、人がいかに運命を変えようとしてものがれることはできない」と解説し、「この運命前定の物語は最近多く記録され、西欧ではすぐれた研究も世に問われている。この分類では現段階では必ずしも適切ではないので、その訂正は本集の新話型にゆずる」としている。また、「産神問答」の注記として「ほぼ二つのタイプから構成され、その中間が独立形として炭焼長者を形成している」と以下を挙げている。

A 1. (a) ある男が山の祠に泊まる。(b) 海岸の寄り木を枕に寝ている。2. 神々が彼らの家に生まれる子どもの将来を語っているのを聞く。女兒には福がある。男児には福がない。3. 神の予言を聞いた両親は、生れた子どもを許婚にする。4. 彼らは裕福になる。

B 1. 夫は妻を嫌って離縁する。夫は貧乏になる。2. 女房は再婚し黄金、酒泉を発見して富む。3. 先夫はそこに物乞いする。あるいは蓑を売りに行く。4. 元の女房が米・味噌・握り飯の中に小判を入れて与える。5. (a) 先夫はそれを知らないで捨てる。(b) それを知って前非を悔いる。6. もしくはその飯を他のものにやる。もらったものは裕福になる。

「炭焼長者」というタイプ名をもつものは、149A「炭焼長者・初婚型」と149B「炭焼長者・再婚型」の2つがある。「炭焼長者」と題される昔話はこの3つのタイプのどれかに分類されている。3タイプのどれに分類されるかは次の条件による。「神のお告げ等によって、女が貧しい男の押し掛け女房となり、女が夫の所有している金を見つけて長者となる」話を中心に語られる場合「炭焼長者・初婚型」となり、「何らかの理由で夫に離縁され、別の男と再婚し、そこで長者となる」話を中心に語られる場合（その後の夫の後日談や再会後の話も加わる場合もある）「炭焼き長者・再婚型」となる。そして、ここで取り上げる昔話のように、誕生時の運のエピソードが語られるものが、「産神問答」に分類される。しかし、ここで取り上げる昔話が「炭焼長者」の題で語られているように、3つのタイプに属するものを大きく「炭焼き長者」の類話として、ここでは検討していきたい。

また、稲田（1988）はこの151A-1を「むかし語り」の「Ⅵ 誕生＜運命的誕生＞」の145B「炭焼き長者—再婚型」のサブタイプとして分類している。このタイプは次のモチーフからなる。

- 1、友だち2人が海辺の寄木を枕にして寝ていると、立ち寄ったネリヤの神が寄木に、今夜生まれた男の子には竹一本の位を、女の子には塩一升の位を授けた、と告げて去る。
- 2、それを聞いた1人が、生まれた男の子を女の子と夫婦にすると、家は富み栄える。
- 3、夫が妻の作る粟飯を不満として離縁すると、妻は倉から飛び出た白い蛾の後をつけ炭焼きと再婚する。
- 4、妻が炭焼きかまどの石を持つと、石はすべてお金となり、夫婦は金持ちとなる。
- 5、乞食になった前夫が先妻のもとを訪ね、先妻と知って舌を噛み切って死ぬ。
- 6、先妻が前夫を葬ると、墓から草が生え、たばこの起源となる。

稲田（1988）は、このサブタイプは福分を持つ女の運命を語ることに中心が置かれる点で「運定め一男女の福分」と区別されること、炭焼きと結婚して幸運を得るという主題は「初婚型」の方が鮮明であると説明している。

以下にこれら2つのタイプを挙げる。

145A「炭焼き長者一初婚型」

- 1、縁遠い公家の娘が神様に祈願し、山奥の炭焼きが夫となる人だ、とお告げがあったので、その男を訪ね頼み込んで嫁になる。
- 2、嫁が夫に小判を持たせて買い物にやると、夫は途中で水鳥めがけて小判を投げてしまう。
- 3、嫁は小判の値打ちを話してきかせ、夫の案内で炭焼きかまどでたくさんの小判を見つけて大金持ちとなる。

147「運定め一男女の福分」

- 1、金持ちの男が旅立ち神社に泊まっていると、立ち寄ったよその神様が、今夜生まれた貧乏人の女の子は塩一升の運に、金持ちの男の子は青竹三本の運に生まれついている、とそこの神様に話して去る。
- 2、男は、神様の話していたとおりに子どもが生まれていたので、息子と貧乏人の娘とを許婚にする。
- 3、成人した息子は娘と結婚して竹細工を業とするが、妻を嫌って追いだす。
- 4、女が結婚して金持ちになると、落ちぶれた前夫が竹細工を売りに来て、女は前夫と気づき食べ物にお金をつめて与える。
- 5、前夫はそれに気づかず、食べ物を乞食に恵んでしまう。

このタイプでは、男の運命に中心が置かれ、与えられた運命をのがれようとする試みもむなしい結果に終わると説明する（稲田、1988）。

ATの分類に関して、関と稲田は必ずしも一致していない。これはATの分類では適切に分類しきれないこと、また、ATのいくつかの分類にまたがることを意味している。その点で、日本独自のタイプということもできよう。ここでは、稲田（1988）の述べる説をあげる。稲田は、ATの分類ではこのタイプの同一タイプはないが、対応タイプとしてAT1642「よい取引」を挙げている。

また、稲田は「運定め一男女の福分」について、ほぼ同一タイプとして関の「産神問答」を、ATタイプでは「主要モチーフは一致するが一部のモチーフに差異が見られる」737B*「運のよい妻」を挙げている。

以上、本論で取り上げる昔話「炭焼き長者」は、関の分類では「運命と至富」、稲田の分類では「運命的誕生」に分類され、関は「至富」に稲田は「誕生」に強調点を置く点は異なるが、ともに「運命」に関わる昔話として分類している。この昔話のテーマは「運命」に関わることであることがわかる。

次にタイプからこの昔話を考察する。関のタイプでは「産神問答」に分類される。稲田はこのタイプを「運定め一男女の福分」のほぼ同一タイプとしている。稲田はこの「産神問答」のタイプを男性主人公の視点で語られている話であると考えていることがうかがえる。しかし、この昔話は、個々のエピソードは異なるものの、稲田のタイプ「炭焼き長者一再婚型」のモチーフをすべて含んでおり、稲田のタイプ「炭焼き長者一再婚型」のタイプに属すると考えられる。つまり、この物語は、女性主人公の運命を中心に語りつつ、その一方で男性主人公の運命も語っていることが特徴として挙げることができる。これらの特徴を踏まえて、関の挙げた3タイプの類話を参考にしつつ、心理学的に考察したい。

IV、運命を授けられること

竜宮の神と寄木の会話を、偶然、男の子（後の先夫）の父親が耳にすることから始まる。

タイプ名となった「産神」とは、出産前後の妊産婦と新生児とを見守ってくれる神のこと（稲田ら、

1994)で、ここでは竜宮の神となっている。類話では、山の神、鳥の神、賽の神、氏神、また、厠の神や箒神、観音・地藏などであり、それぞれの土地で信仰されている神が登場しているようである。この物語では、産神として出産に立ち会うと同時に、生れた子どもの位をつける。稲田ら(1994)の挙げている産神の説明には、運命を授けるという属性は述べられていないが、昔話では運を定めるものとして登場する(稲田ら「運定め」の項目、1994)。しかし、竜宮の神と寄木の会話からは、神が運を授けたというより、その子が生れついた運に位を授けたというほうが適切かもしれない。出産に立ち会う時に神にはその子と共にある運が見えるのであろう。

女の子には塩一升、男の子には竹一本の位が与えられる。塩は日常生活に欠かすことができないものであり、入手しがたいものとして大切にされてきた(稲田ら、1994)。それをたくさん持っているという意味で塩一升は福分があることを、それに対して竹一本は福分が無いことを例える言い方である。また、豊田(2013)によると塩はスピリチュアリティや知恵を象徴するという。つまり、この女性は豊田のいうスピリチュアリティや知恵を持って生まれた特別な女性ということもできる。他の類話でも、表現は異なるが、女の子にはよい運が、男の子には悪い運が授けられる。

この話では女の子と男の子の家はどちらも長者であり同等の身分であるが、類話では男の子の家が金持ちであるのに対して、女の子はその家の下女や乞食の子どもであるなど境遇の違いが述べられる場合もある。世俗での境遇はいろいろであるが、幸運を持って生れた女性である。一方、男の子は長者や金持ちなど境遇のよいところに生れるが、境遇のよさに反してどの場合もよくない運を持って生れる。それぞれ与えられた運を持ってどのように生きていくのかがこの物語に描かれているといえる。

男の子の父親はこれを聞いて自分の子どもをこの女の子と結婚させようとする。我が子の運をなんとかよくしようとする親のもくろみである。しかし、神の言葉を素直に聞くことができるこの父親は、神や自然を信仰し敬う姿勢を持っていることがわかる。また、運の悪い者が運のよい者と結婚すれば、夫婦ともに運がよくなるという思想もうかがえる。運のよいものは、悪い運を持って生れた人の運をも引き上げることがで

きるというのである。幸運を持った女の子は人を幸せにする力をも持って生れたともいうことができる。

V、夫婦の有り様の違い

男の子の父親のもくろみ通り、二人は夫婦となる。しかし、祭りの日に女房の差し出した麦飯を蹴飛ばした夫を見て、女房は家を出ることを決心する。

ここで夫婦の有り様の違いが明らかとなる。その違いとは神や先祖などへの信仰に対する態度の違いである。妻は麦の収穫祭を祝って神や先祖に麦飯を炊いて供える。神や先祖に麦が収穫できた感謝を祈るのである。そこには、神や自然への感謝や尊重がうかがえる。それに対し、夫は、女房の差し出した麦飯を怒って、膳ごと麦飯を蹴飛ばす。収穫できた物への感謝、ひいては自然への感謝や神を敬い畏れる態度が見られない。河合(1982)の言うように「まったく高慢」である。父が持っていた神の声を聞く姿勢すら引き継いでいない。豊田(2013)はこの夫のことを物質主義で神を敬うという意味を分かっていないと述べる。自然や超越的存在である神に開かれた心を持っている女性とそのようなものを認めない男性という対照的な心の有り様をもっている二人である。

別の類話では、「女は日に塩を一升使い、盃は手から放さない、夫はこの妻がいなかったらもっと長者になると思い離縁する」、「女房は己にも人にも酒を飲ませ取り引きも広く倉小屋が九十九戸前の長者になる。夫は小心者であと一戸で百戸前になるというので戒めようと思い旅の六部に相談する」など、異なる形ではあるが、夫婦の対照的な有り様が述べられている。ここでは、女房は人の出入りを拒まず他人にも気前よく酒を振る舞う人物として表現されている。一方、夫はもっと長者になろうとする私欲や女房を戒めようとする心の狭さを持つ人物として表現されている。

この昔話と類話では異なる有り様を示す女性像であるが、共通しているのは神や他者に対して「開かれた心」を持っている事である。それに対して、夫は怒って祝いの麦飯を蹴飛ばしたり、もっと長者になろうと思ったり、小心から戒めようとしたり、自分しか見えていない「閉じた心」を持っているといえよう。

Ⅵ、決意

女性はこの開かれた心に従って生きていく。夫のこの行為を見たとき、次のように言う。「私はとてもここで暮しをすることはできません。この家倉は父さまがあなたに渡したものですから、あなたの自由にして下さい。私は今あなたが飛ばした膳と椀だけ貰って、どこへでも落ちていきます」。女性からの決別の意志表明である。これについて河合（1982）は「彼女は耐える女性から、意志する女性へと変貌する。彼女は自らの意志によって、夫と別れ、他の生活を打ち立てようとする」と述べる。また、豊田（2013）は「自分で自分の人生を選んだ」ことの重要性を挙げる。

河合や豊田の指摘は正鵠を得ている。というのは、この昔話で語られる「女性からの離別」は他の類話では見られないエピソードだからである。夫婦は何らかの形で別れるが、理由はどうであれほとんどは夫から離縁される形をとる。この昔話と同じエピソードであっても類話では「麦飯を食べさせた」と言って夫が怒って妻を追い出すのである。他の類話にはみられないこの昔話の大きな特徴である。河合や豊田が述べているように女性が唯一自らの意志を表明する貴重な物語なのである。

「麦飯を食べさせた」という夫の怒りは、自分を馬鹿にしたという怒り、自己愛を傷つけられた怒りである。一方、「麦飯を蹴飛ばした」ことから家を出ていこうとする妻の決意は、「食べ物粗末にする」どころか「神への捧げ物」をないがしろにする不遜な態度への怒りとみることができる。妻の感じる怒りはそのような行為への正当な怒りである。この怒りゆえに家を出ていく「決意」をする。

河合（1982）は、この女性は元々父親の言うままに結婚するという受動性を具えていたが、ここにおいて受動性から積極性への反転が生じたと述べる。確かに、父親の言うとおりに結婚し夫に仕えるという受動性すなわち耐える女性としての積み重ねがあったとみることができる。しかし、彼女の受動性は、与えられたものをただ受け身に受取る消極的な受動性ではなく、与えられたものを主体的に受け入れる積極的な受動性であったのではないだろうか。夫の行為に対して語られた見事な言葉から、積極性を内包した受動性であると筆者は考える。

類話では、夫が離縁する理由が述べられている。「父親が死ぬと」、「貧乏人の娘を嫌って」離縁するなど、最初のエピソードとのつながりで語られており、父のせつかくの親心も息子にはわからない。また、「貧乏になったのは女房のせいだ」と責任転嫁して離縁する。これらの描写は、今まで語ってきた夫の有り様と矛盾しないものであり、その特徴を一層強めるものである。彼からすれば、父親に無理に妻を決められて、世間的に見れば自分とは釣り合わない妻であり、その妻をやっと自分の意志で離縁できたことになる。「意志」という点では女性と同じだが、そこには、やはり自分しか見えていない「閉じた心」がある。夫はこれらのことがどこから生じているか目に見えないものに心を巡らせることができない。

Ⅶ、女性を導くもの

女性は門を出ると、二柱の倉の神の会話を聞いて、炭焼き五郎の所に行くことを決心する。「神に開かれた心」をもったこの女性は神の声を聞くことができその声に素直に従う。河合（1982）は、この倉の神を「彼女の心の奥深くに存在する知恵の顕現」と考える。また、心理学的にいえば無意識界の深層との深いつながりを持っている女性ということができるという（河合、1982）。豊田（2013）は、彼女が神の声を聞くことができるのは生れつきの能力であり、その声は彼女の中にある知恵の声であり、女性的なスピリチュアリティにつながった声であるという。河合も豊田も、この女性が特別な女性であり、倉の神を女性の心の深いところにある「知恵」と解釈する。そして、両者ともこの知恵は男性的な要素とつながっていると述べる。河合（1982）は女性の背後に存在する竜宮の神や倉の神は男性像の感じがすると述べるし、豊田（2013）は女性の心の中にある肯定的なアニムスであるとする。

この知恵はどのような形で表れるのだろうか。類話を見てみたい。「倉の前で泣いていると倉の俵の音が聞こえる」、「倉の中で寝ていると話が聞こえる」などこの話と同じ展開をたどる話の他に、「雀が来て山に連れていく」、「牛に乗っていくと貧しい家の前で止まる」など動物に連れられていく話がある。その中で次のようなエピソードを語る話がある。「途中山犬に会うが、お前はほんとうの人間だから食わないといって

宝眼鏡をくれる。りっぱな人に会うが宝眼鏡で見るとけだもの。柴を背負った爺を眼鏡で見るとほんとうの人間。結婚する」。この話では、動物の目からみればこの女性が「ほんとう」の人間であることがわかること、人の目では「ほんとう」の人間を見分けることができないことを伝えている。ここで述べられる「ほんとう」の人間とは、世間的に金持ちであるとか、身分が高いなどの外的なものではなく、内的なもの（たとえば、竜宮の神が与えた位）を表しているのだろう。別の類話では、「狼が、狼のまつげをかざして見ると、たった1人人間が通るからそれに従って行けと教える」。外的基準ではなく内的基準で探すことを教えているのかもしれない。

何かを決定するとき、客観的に状況を判断しメリット・デメリットを考え、よりメリットの多いほうを選択する。そこで使用される基準は外的基準である。その様な判断をするのが自我意識であり、いかえれば男性の意識ということもできる。夫から見れば、長者の身分の自分が乞食の娘と結婚することなどあり得ない選択である。しかし、ここでは全く異なる基準で選択が行われる。そのような客観的基準の元となる自我意識に頼ろうとせず、むしろ自我で判断することを放棄して、神や動物で表される無意識の知恵に頼ろうとするのである。これを女性的な選択の在り方ということもできる。選択した理由は客観的な基準では説明できないかもしれないが、この知恵は直感として女性に与えられたもので揺らぐことはない。

「初婚型」でも、同じことがいえる。「神に祈願してお告げをもらう」形が多く、三輪明神、出雲の神、または観音など、自らが信仰している神に祈願する。夢で見る場合、占いや易に見てもらう場合もある。いずれも、自我を越えた存在に自分の運命の夫を委ねるのである。なかなか良縁が得られないゆえの「神頼み」でもあるが、女性が求めている伴侶は彼女の内的基準を満たす必要があるからだろう。

Ⅷ、女性からの求婚

女性の内なる声に従って、炭焼五郎の家に行き、女性の方から求婚する。この女性からの求婚について、河合（1982）は彼女の特徴である「積極性」をよく表すものとしている。そして、このような女性を西洋の

昔話で見出すことは難しいだろうと述べる。確かに、筆者が、今まで論じてきた日本の昔話の中でも、このように自分から男性に求婚する話は見られない。多くは、父親が引き起こしことをきっかけとして、男性と結婚することになるというものである。しかし、たとえば「たにし長者」の娘は、父からの結婚依頼に対して「父さまがせっかくああいう約束をされたことですから、わたしがたにしのところに嫁に行きます」と、いやいやでなく積極的に受け入れる（千野、2013）。これを筆者は積極的受動性と捉える。前述した通り、この女性もこの積極的受動性を持った女性であると考えられる。筆者はこれを（与えられた運命を受け入れて生きることによって運命が開かれていく）女性的な積極性だと考えていた。しかし、女性が自分から行動をおこし求婚するという行為は、その積極性を越えたものである。このような積極性はどこから生じたのか。河合（1982）は知恵を背景にした積極性と述べる。つまり、心の内なる声に裏打ちされた積極性である。自分の内なる声に従うとき、行動的とも言える積極性が発揮されるのだろう。この行動は手なし娘が家を出て水を飲もうとして子どもがずり落ちそうになったときに思わず出た行為ともつながる（千野、2012）。そこで行われるのは、自我に留まらない心の全体的な動きとしての行為である。

女性の内なる声はどのような男性を選んだのだろうか。「心も美しく姿も美しい働きものだ」と倉の神は話す。類話では、「ほんとう」の人間を探すよう教えられる。一方、初婚型の類話では、「世の中のほんとうの貧困者である」と語る。しかし、神様の命令なので仕方がないと殿様の娘は「神様の命令でここまで来た」と五郎に求婚する。

柳田（1963）によると、炭焼きというのは特別な者だけが手に入れることのできる技であり、この技を神技としてその開祖を神とする者があったとしても不思議はないと述べる。そこから、河合（1982）は「潜在的には神とつながる位をもつ」者であると同時に下賤の者である両面性を持つ存在であると述べる。つまり、現実的には身分の低い者でありながら、内的には神につながる位を持つ存在であるということが出来る。そのような男性へと女性の内なる声は導いたのだ。

さて、男性からみると、この求婚はどのように映るのだろうか。見知らぬ立派な女性が尋ねてきて、「嫁に

もらって下さい」と言う。この展開は、鶴女房を初め異類女房と同じである。もちろん、鶴女房の話では前段階として鶴を助けるエピソードが入るし、その後正体を見られて去っていくという結末になる。突然の押し掛け女房に対して、男性は断わるが再度女房が求婚する。鶴女房の男性は、「さて厄介なことになったものだ」とつぶやく（関、1956）のに対して、「そんなにいわれるなら、どうかわたしの妻になって下さい」と今度は五郎の方から求婚する。女性からの求婚に対して二人の男性の対応の違いは明らかである。鶴女房の男性は消極的で受け身であるのに対して、五郎は積極的に受け入れる。

女性からの求婚によって、外的には全く身分の違う二人が結婚する。

Ⅷ、女性が男性のもっている価値を見出す

その次の日の朝、二人で炭竈を見て回るとすべての竈に黄金が入っていた。結婚後の黄金発見である。河合（1982）は、この二人の尋常でない結婚の成果、あるいは聖なる結婚の帰結としての黄金であると述べる。

類話では、結婚して長者になったということだけを強調して終わるものもあるが、黄金を発見するきっかけが述べられるものが多い。「家の床の下には光がさして金の延べ棒がある。夫に尋ねると炭を焼くところから金が出て困るといい、炭窯のあたりに山のように積んである」、「男にお金をやって何か買って来てもらおうとするとこれと同じものはいくらでもあるという。炭焼くところの岩を見ると金であった」。特に初婚型では、次のようなエピソードが語られる。「娘は炭焼きにお米を買ってくるようにと言って小判を渡す。男は途中で池に泳いでいる鴨に小判を投げつけ、何も買わないで帰る。娘が惜しいことをしたという、あんなものは炭を焼くところはいくらでもあるという」。五郎は、女房の渡したお金や小判を鴨などの鳥に投げつけてしまう。その目的は、「ごちそうにするため」、「鴨を殺して食べるため」である。五郎にとって、このときの金は、鳥をしとめるための道具である。その点で普通の石と変わらない。また、炭を焼くと出てくる厄介なものでもある。彼は金の値打ちを知らない。これは彼の無知さや愚かさを示すともいえる。それに対して、女房は驚いたり、歎いたり、怒ったりし

て、小判の大切さを伝えると、五郎はそんなものはいくらでもあると、金を発見するのである。

河合（1982）は、これについて、「そこらは黄金で満ちていたのだから、五郎はそれが価値あるものと知らなかったのである。ここにおいても女性の隠された価値を見出す力は見事に示されている。彼女は炭焼き五郎がそれと知らずに潜在させていた価値あるものを引き出し、それを役立てることを教える役割を演じる」、そして、「男性の潜在的な宝を見出すことによって幸福を得る」と述べる。

また、豊田（2013）は、「男性は働きの意味を分かっておらず、主人公の女性がそれを示すのである」という。また、女性的なスピリチュアリティの視点から、「男性は形にするが価値を分かっている。女性が価値を分からせる。そして、二人で一つのものを達成するのである。創造性というものは男性の力だと言われるが、本当の意味が分かるのは女性的な力である」と述べる。

結婚という視点からみれば、実際に生産し所有するのは男性であるが、その意味や価値を見出すのが女性であるという指摘である。一方だけではだめで、夫婦二人があって初めて活かされるのである。象徴的な合一を示す結婚があって、「黄金」が価値あるものとして生じたといえる。男女どちらか一方の価値が高いというのではなく、その役割は異なるが、同等に必要なものなのである。

女性の視点から見れば、「男性の潜在的な宝を見出す」ひいては「隠された価値を見出す」のが女性の働きと考えられる。この働きは豊田が述べているように、目に見える具体的な形が生じるわけではなく、目に見える形に表れない機能のようなものである。しかし、目に見えているものを意味あるものにする上で重要な働きとなる。

また、豊田（2013）は柳田の論をもとに、この女性は神話の「玉依姫」の末裔であると述べる。柳田（1963）はこの女性の系譜をたどり、前述した考察に加えて次のように述べる。「貴き炭焼小五郎（本論での名前は五郎）が玉世姫の力に由って顕れたと謂ふのは、最初極めて之と近い神話から、成長して来た物語と見ることができるのである」という。つまりこの女性は元来神の働きをこの世にもたらす巫女としての要素を持つ女性であったのである。そのように考えるなら、この男性がこの世の価値としての黄金の値打ちを知らない

のも当然であるし、女性の生れながらの位の高さも領けるのである。内なる声に従う女性であるが、その声を「この世に生きること」に活かすのである。それが長者になるということである。

X、先夫の結末と再会

福分をもった女性の物語はここで終わりとなるが、ここから福分のない先夫の話となる。

どの場合も、先夫は暮らし向きが悪くなって貧乏になり、竹細工物や簞を作って売り歩く、あるいは乞食や物もらいとなる。そこで、知らずに女性の家に行き先妻と再会する。

すべての話において、再会したとき、先妻である女性は先夫であることに気づくのたいては、先夫は彼女が誰であるかわからない。女性が先夫だとわかり、売りに来るたびに竹細工物や簞を高く買ってやる。あるいは握り飯や味噌の中に金を入れて与える。女性は、以前自分にされた先夫の仕打ちを恨みに思わず、むしろ以前の夫であったというよしみゆえに、また彼の境遇を気の毒に思いもてなす。彼女の「他者に開かれた心」がここからもうかがえる。

これに対する先夫の反応はどうであったか。この話では、先妻が竹の細工物を高く買ってくれたことを「馬鹿な女がいたものだ。こんどは大きな籠を作って来て売ってやろう」と考える。感謝するどころかそれにつけこもうとする先夫の心の有り様は二人が別れたときと少しも変わらない。「高慢」であり、自分のことしか考えていない。

そして、女性は自分が別れた妻であることを教えると、さすがの先夫も「たいそう恥じて舌を噛み切って死んでしまう」。他の類話では「驚いて死ぬ」などその衝撃の強さが語られる。しかし、恥じるにせよ、驚くにせよ、先夫の感情は自分自身に向けられており、死ぬまで「閉じた心」のままである。

ところが死んで終わりにならず、先夫の死後が語られる話がある。この話では、女性は倉の下に先夫を葬り、倉に生き物をのぼらせないように言う。それから高倉の新築祝いの慣わしになったという。類話では、「死体を埋めると木が生える。それがタバコのはじまり」、「竈の後ろに埋める。…荒神様は竈神になる」、「時鳥になり鳴く」、「鳴いて蟬になる」など、死によって

も解消しきれないエネルギーが姿を変えてこの世に残っているように思われる。このエネルギーを収めるためにこのようなエピソードが生じたのかもしれない。あるいは、位の低い存在ゆえに「あつく葬る」ことや「神として祭る」ことが必要となるのではないだろうか。

多くの話は、女性がせっかく先夫にいろいろ施すが、「米の中に金を入れて与えるが気づかず、米も金も人に与える。後に味噌をもらいに行く。中に金を入れてやるがこれも気づかずに人にやる」、「小判を入れた握り飯をやるが、橋の上から投げて魚にやってしまう」など、先夫の運のなさが語られ、「運は生まれつきあって、変わらない」と締めくくりの言葉がある場合もある。

特筆すべきは、次のような結末をもつ話があることである。このような先夫の運の悪さにたいして、女性は、炭焼き長者の夫に相談して、家の下男になることをすすめる。先夫は炭焼き長者のところで一生を送ったというものである。これに対して河合は「前夫をかわいそうに思って同居させるところが、西洋の昔話には類例を見ない特異な点と思われる」と述べ、この特異性を女性の意識を表すものとして以下のように説明する。一度は切断した関係を、何らかの方法で修復しようとする。つまり、女性の意識は何ものをも取り入れて、全体性を目指そうとするのである。それゆえ、女性は自分の生き方と反する生き方をしてきた先夫を、なんらかの形で受け入れなければならない。それが、下男として同居するという形になったものだとする。

確かに、この結末は、先夫を切捨てて排除するのではなく、その存在をも取り入れようとする在り方が表現されている。これは心の全体性を目指す在り方であり、このような在り方がこの昔話に表現されているという事ができる。狭い自我からすれば先夫と同居というのは本来ありえない選択である。そのありえない選択を成し遂げるところは、夫の協力があるにせよ、「開かれた心」を持ったこの女性の大きな心ゆえであると思う。

XI、運命を生きるということ

生まれたときに運を授かった女の子と男の子はそれぞれどんな人生を生きただろうか。物語の筋からは、福分のある女の子は幸せな人生を、福分のない男の子

は幸せでない人生を、つまり与えられた運命通りの人生を生きたとすることになる。そこから、「運は生まれつきあって、変わらない」と締めくくる。果たしてそうだろうか。

山口(2009)は、運命と個性化について以下のように述べている。『『自分自身になること』つまり個性化は、運命そのものと大きく結びつき、運命とともに展開されていくと言える』。しかし、「思いどおりにならない運命ではあっても、それを抱えながら共に歩いていくことと、自らの不運を嘆きながらただ運命に引きずられていくこと、あるいは不運をすべて運命のせいにして、責任から逃れることとは同じでない」と与えられた運命に対してどのように向き合うのかというところにその人らしさが存在すると述べる。

二人は与えられた運をどのように生きたのだろうか。河合(1982)は、先夫のことを、「生まれながらの運命を、何らかの方法で修復しようとする彼の父の意図に従って生きた人間である」と述べ、女性のことを、「運命に対して、常に深いかわりを持ち、それを受け容れる生き方をしてきた」と述べる。河合の述べるように、与えられた運命に対して正反対の関わり方をした二人である。

運命との関わりで、二人の生き方を見てみたい。確かに河合の言う通り、先夫は運命を修復しようとした父の意図に従い女性と結婚する。しかし、結婚はうまくいかず別れ、貧乏になり、先妻である女性の所に行き施しをもらうが、それすらも彼の運をよくする助けにはならない。河合の言うのとは異なり、筆者はむしろ先夫はせっかくの父の意図に従わずに結果的に運命通りの人生を送ったと考える。父から与えられた結婚は、本人の意志ではなく、彼にとっては自分の意志によらない外から与えられた運命とみることができる。その運命と積極的に関わり受け入れるのではなく、この話では受動的に受け入れているし、類話では自分から離縁するなどむしろそれから逃れようとする。そのことがかえって自分の元々の運を引き寄せることになっている。運命という目に見えないものと関わろうとせず、「閉じた心」のままである。一方、女性は河合の言う通り、与えられた運命を積極的に受け入れ、その関わりにおいて自分の意志を表現し行動していく。彼女の意志は、運命に向きあいその中から生じてきたものであり、夫のそれとは異なる。夫の意志とは、

類話の妻を追い出すことや、大きな籠を作って先妻のところを持っていくことにかがわれる。また、彼にとっては、父の定めた結婚は自分の意志によらないものだったのだろう。与えられた運命に不満を抱きつつ、そこから逃れるための意志である。

しかし、与えられた運命を次のように解釈することも可能ではないだろうか。運というものはまさに生れながらのものであり、物語の語るように変えようがない。ひょっとしたら、運の向き合い方すらもその運の中に組み込まれているのかもしれない。そう考えるなら、それぞれの向き合い方は運が異なるゆえに違うのは当然である。運とその向き合い方も生れつきであるから仕方がないものである。どんなにひどい運でどのような向き合い方をしているとしてもその人間の個としての責任ではない。つまり先夫の運命との向き合い方がよくないと批判しても仕方がないのである。むしろ、その運を持ちそのような生き方をせざるをえない男性への温かい眼差しがこの物語に描かれていると理解することもできる。これが女性の最後の先夫への心遣いである。先夫の行動を本人に起因させずに、運の悪さとして扱い救済しようとするのである。ある意味それは宿命論的な考え方になるが、それぞれが自分の運命を必死に生きているという考えに立って、この物語の先夫を見ることができる。多くの話では先妻の施しもむなしく、先夫は乞食あるいは竹細工物売って生きて行く。個を越えた大きな視点で見れば、生きるということに価値の優劣はなく、それはそれで運命を全うした一つの生き方となるのではないか。そのような運の捉え方もこの昔話は教えてくれる。

Ⅷ、終わりに

本論では、ユング心理学の立場で解釈された観点を基にしながら、「運命」という視点を加えて、この物語を考察した。確かにこの女性主人公の在り方には注目すべき点がある。神とつながる内なる声を聞くことができる女性であり、潜在的な力を見出すことができる。そこには目に見えないものを見る力がある。豊田(2013)は、そのような力は本来女性すべてが持っている力であると述べる。また、河合(1982)は、日本人の自我=意識を考える上で、女性の意識を提唱し、その頂点としてこの女性を取り上げ検討し、この意識

は未来を先取りするものでもあると述べる。二人が述べるように、この昔話の女性像を今後も考えていくことは大切であろう。その時、別の運命を全うした存在である先夫についても視野に含めることを忘れないでおきたい。

本論では、二人の心の在り方を、「開かれた心」「閉じた心」という軸でも考察した。先夫の「閉じた心」は、運命の中で自分を守るために閉じざるを得ないものであった。女性の「開かれた心」とは、他者に向かって開かれていると同時に内面に開かれていることをいう。開かれることで他者とつながり、内面の深みとつながることができる。ここでは二人の在り方の特徴として述べたが、一人の人間の中でもこの両方が様々な割合で生じるものである。今自分の心がどのくらい開いているかあるいは閉じているのかを意識しておくことは意味のあることではないかと思う。それが運命に向かい合うことと連動している気がするのである。

註

註1：日本ユング心理学研究所 2012 年度講座セミナー 156 <日韓共同セミナー：昔話と女性> 「昔話にみる結婚、そして選ぶということ」での豊田園子先生の講演である。本論文で引用するのはこの講演の内容からである。筆者の聞きによる。

引用文献

- 稲田浩二 (1988). 演習版・日本昔話タイプ・インデックス 同朋社.
- 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編 (1994). [縮刷版] 日本昔話事典 弘文堂.
- 伊藤清司 (2007). 炭焼き長者の話—柳田國男と松本信廣— 史学 75 (231), 211-231.
- 河合隼雄 (1982). 昔話と日本人の心 岩波書店.
- 関敬吾編 (1956). こぶとり爺さん・かちかち山—日本の昔ばなし (I)— 岩波書店.
- 関敬吾編 (1957). 一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎—日本の昔ばなし (III)— 岩波書店.
- 関敬吾 (1978). 日本昔話大成第3巻 本格昔話二 角川書店.
- 千野美和子 (2012). 日本昔話「手なし娘」にみる信

- 仰 京都光華女子大学研究紀要第50号, 29-39.
- 千野美和子 (2013). 日本昔話「たにし長者」にみる精神性 京都光華女子大学研究紀要第51号, 13-24.
- 山口素子 (2009). 山姥、山を降りる 現代に棲まう昔話 新曜社.
- 柳田國男 (1963). 炭焼小五郎が事 定本柳田國男集 第1巻 筑摩書房, pp.317-349.